

書評

●真口 宏介(手稲溪仁会病院・消化器病センター長)

IPMN/MCN 国際診療ガイドライン

日本語版・解説

著：国際膵臓学会ワーキング
グループ

訳・解説：田中 雅夫

B5 頁84 2006年
定価4,830円(本体4,600円+税5%)
[ISBN 978-4-260-00232-5]医学書院刊

International Consensus Guidelines for Management of Intraductal Papillary Mucinous Neoplasms(IPMN)and Mucinous Cystic Neoplasms(MCN) of the Pancreas(Pancreatology 6: 17-32, 2006)の日本語翻訳版が出版された。粘液産生膵癌として本邦から発信され、その後、粘液産生膵腫瘍，“いわゆる”粘液産生膵腫瘍，膵管内乳頭腫瘍，膵管内乳頭粘液性腫瘍(IPMT)など、さまざまな用語で呼ばれた疾患が「IPMN」として世界的に共通の疾患名で呼称されるようになり、また「MCN」が「IPMN」とは違う疾患群であることがきちんと整理された意義はきわめて大きい。さらに本書では、英文からは読み取り難い微妙なニュアンスを見事に日本語で表現し、理解を深めるために画像を追加した絶妙な構成には、国内委員として参加させていただいた者として、あらためて訳者の田中教授に敬意を表する次第である。

本書の特徴は、設問に対して回答する形式を採

用しているため、飽きることなく熟読しやすい。また、途中で疑問が浮かび、読み返しが必要な場合にも、読みたい部分を設問から探すことができる。さらに、後半には英文報告がそのまま掲載されているため、英語による表記や表現の勉強にも非常に役に立つ。

現在まで、種々の疾患に対する診療ガイドラインが作成されてきているが、その多くは日本国内のものであり、国際的なガイドラインは少ない。その理由は、国内だけでも意見を集約することが難しいのに、診療状況や意見の異なる海外の医師たちと英語で討論し、集約しまとめる作業は困難を極めるからである。その大変さは想像に難くなく「よくここまでまとめあげられた」と感心する次第である。その苦労の一端は、「著者からのメッセージ」と「はじめに」の頁で読み取ることができる。

ガイドラインの利点は、共通の用語で討論できるようになること、その時点までに明らかになっていることと今後に検討が必要な事項が共通に認識できることである。

もちろんガイドラインとは、その後の理解が進むにつれて改訂が繰り返されるものである。その中での記念すべき第1号をたくさんの人に読んでいただき、共通の認識において今後の臨床研究、討論を行いたいと切に願う。特に、本邦において多数の知見を蓄積してきた疾患でもあり、日本語での出版が熱望されていたものである。

必ず役に立つと考え、ここに推薦する。